

中村 皆さんこんにちは。お越しいただきありがとうございます。当プロジェクトは、所長の方から述べられた背景をもつ、人間科学研究所の一角にあるひとつのプロジェクトです。今年度から日本財団の支援によって各講座が成り立っています。もともと日本財団が力を入れて取り組んでいる多様な社会的養護に関する取り組みのなかにあります。社会的養育について厚生労働省が大きな政策転換をはかってきたことに呼応しています。日本社会が持っていた積年の課題でもあります。

あとで高橋様より詳細なご紹介があります。このプロジェクトでは「社会的養護」という言葉と「社会的養育」という言葉を使い分けています。全体としては「社会的養育」という言葉で、護るだけではないだろうという私たちの思いがあって「社会的養育」という言葉を使っています。

それと何か特別なニーズがある子どもたちに対する社会からの発達保障ということだけではなくて、ユニバーサルには社会的養育へと仕組みを整えていかないと、単に虐待対応とかDV対応、特別ニーズというだけではなくて、社会が責任をもって子どもを育てあげていくというユニバーサルな仕組みをどう作るかということと関わって意識して社会的養育という言葉を使っています。事件としては虐待対応というテーマが社会的養護として浮かび上がってくるので、どう対応しようかというのは大変分かりやすい言い方です。でもそれだけだと狭いとも思っています。つまり、成人規定も変更されましたが、18歳までの青年の自立をきちんと保障するというユニバーサルな社会的養育の仕組みをどう作り上げていくかがカギです。虐待があろうとなかろうと、もともと必要なテーマであったと思うのです。長く取り組みをしてきた日本財団の取り組みに敬意を表するとともに、学術機関としての大学として連携・協力できることがあるとしたら、基本は教育・研究の機能を発揮することです。社会的養育や社会的養護の研究は各大学で盛んだと思います。そこで、現在、社会的養育の任についている方々の職業行動を洗練させるということも大事ではないかと考え、現職者の高度化に資するプログラムを開発しようと計画をしたのです。

通例「社会人講座」と呼んでいますが、それだけではなさそうなテーマもそ

こにあります。社会人に大学教育を開くというだけではなくてです。自問したことは、専門職として実践している社会人に開けるほどに、実践理論としての研究は大学は質が高くないことです。これはやはり大学教育の反省です。専門職の方々と一緒に協働する中で、大学教育も鍛えられると考えたのです。何か社会人に門戸を開くという言い方は、上から目線です。なぜかという「偉そう」だからです。そうではなくて、大学それ自身が一緒に何かをしながら絶えず学術知をリフレッシュしていく、再構成していく取り組みの機会と場を提供することにしたいと考え、省察の実践者、科学的実践者としての職業行動の洗練化に資するような知の生成の場を目指すことを目指しました。

そういう点では、この社会的養育に関わる専門の人たちはたくさんのお仕事があるので、そこに対して一様に講座を作ることで2019年8月からこの講座を動かしました。各地の児童相談所や児童養護施設で里親指導にかかわる社会的養育の任にある社会人が対象です。半年間の講座です。ゼミナールも付けていますので、1回4時間ぐらいやっています。今日もその講師の先生方がお越しです。専門的な知識を知識として教育しながら、事例をベースに研究会のような講座をしています。事例は里親・里子の事例です。社会的養育の事例研究としています。守秘義務の関連で、現在担当されている事例ももちろんありますが、架空の事例もあります。いろいろなケースを持ち寄っていただいて、一緒に勉強しながら半年間かけて講座をしていきます。フォスタリングにかかわるソーシャルワーカーの養成講座という位置づけです。

20人の定員を設定させてもらって、一挙に集まりました。勉強したいなという方々が熱心に来てくれています。ニーズがあるのがよく分かりました。これを数年続けることによって日本のフォスタリングソーシャルワーカー、社会的養育の媒介者となる人たちのリーダーを養成したいなと思っています。当面は五年間です。全部で100人の修了生を目指します。さらにフォローアップの事例検討会も継続するので、社会的養育をささえる実践家集団を形成していく計画です。

大学にノウハウがあるわけではなくて、一緒に協働しながら取り組んでいきたいなという、新しいタイプの講座を設けることができました。そういう形で行っているものの、背景なりその方向性なりを今日は皆さんと共有したいと

思っているところです。

残念ながらその講座の受講生たちは平日ですので、今は児童相談所などでお仕事していますので、もう少し一般的に開放する形で共有します。

併せて参照軸としてヨーロッパの取り組みにも学びたいと思い、今日はわざわざこのためにフランスから講師をお招きしました。あとで詳細にお話ししていただきます。とはいってもこれは日本の常として心しておきたいのですが、「フランスは進んでいる」という比較研究はしたくありません。私たちがどうするかという観点でフランスの経験を学ぶ必要があると考えました。ため息ついて終わりのようなシンポジウムにはしません。それでどうするのだということについてみんなで考えたいなと思っています。シンポジウムではそのことも含めて皆さんとともに考えていきたいなと思っています。

ため息ついて終わりは、もう戦後あるいは日本の近代の100年そんなことばかりだったのです。日本でどうするかということについて日本財団が1つの答えをお持ちです。そのこともありながら私たちと一緒に考えていきます。そんな機会にしたいなと思っています。どうぞ最後までお付き合いいただければと思います。最後は懇親会をします。どうぞ参加してください。長丁場ですが、お付き合いしていただければと思っています。

それではご案内の通りの順番で話をさせていただければと思います。あえて紹介はせずに、ご自分で取り組みの話をしていただければと思いますので、よろしく願います。高橋さんから一応40分ずつぐらい話しをしてもらうことになっていますので、よろしく願います。